

聖書：ヨハネの黙示録 9：1～21

説教題：底知れぬ所に通じる穴から

日時：2021年3月21日（朝拝）

7つの封印に続いて前回から7つのラッパの幻について見始めています。7つの封印の幻では最初の4つが1セットで、その後、第5、第6と続き、最後の第7の封印が解かれる前に比較的長い挿入部分がありました。今見ている7つのラッパの幻も構成は全く同じです。簡単に言えば4+2+挿入部分+最後の第7になります。前は最初の4つのラッパについて見ましたので、今日は第5と第6のラッパに関する部分を見て行きます。

さて今日の箇所にはこれまでも増して「一体これは何だ？」と思わずにいられないことが記されています。しかもそれはおどろおどろしい光景です。端的に言うなら第5のラッパはいなごによる災い、第6のラッパは馬による災いを描いているようです。しかしそれは明らかにただのいなご、ただの馬ではありません。7～9節を見ると、いなごたちの姿について頭には金の冠、顔は人間の顔のよう、また女の髪のような毛、獅子の歯、鉄の胸当て、多くの戦車が急ぐ時のような羽の音などと記されています。これは文字通りに取ることは不可能です。馬についての17節の描写もそうです。この黙示録に記されているのはヨハネが見た幻であり、その多くは象徴的表現で描かれています。ですからその象徴が伝えようとすることを正しくくみ取る必要があります。その時にこの方法によってこそ、かえって良く伝わって来るメッセージがあることを私たちは知るようにされます。

まず第5のラッパの幻から見て行きます。1節に「第五の御使いがラッパを吹いた。すると私は、一つの星が天から地に落ちるのを見た。」とあります。ここにすべての上に主権を持っているのは神であることが示されています。神の指示、神の命令のもとですべては動き、展開して行きます。さてここで一つの星が天から地に落ち、「底知れぬ所に通じる穴の鍵が与えられた。それが底知れぬ所に通じる穴を開くと、穴から大きなかまどの煙のような煙が立ち上り、太陽と空はこの穴の煙のために暗くなった。」とありますが、これは一体何のことでしょう。まず「底知れぬ所」という言葉で思い起こすのはルカの福音書8章31節です。ゲラサ人にとりついていた多くの悪霊、レギオンがイエス様を見て恐れ、「底知れぬところに行けとお命じ

になりませんように」と懇願します。つまり底知れぬ所とは、サタンや悪霊たちのための場所、彼らが閉じ込められているところと言えます。天から落ちた星とは神に仕える良い天使なのか、それとも墮落した天使なのか、議論はありますが、後の11節と考え合わせるとサタン自身か、彼に付く墮落した天使と見る人々が多いようです。イエス様はルカの福音書10章18節で「サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました」と言われました。またすでに見た黙示録1章18節でもイエス様は「死とよみの鍵を持っている」と言われました。そのイエス様がこの穴の鍵を与え、その穴は開かれたということが言われています。

するとその穴から大きなかまどの煙のような煙が立ち上がりました。ここまで来ると大体のイメージがつかめるのではないのでしょうか。つまりこれは悪の力の影響ということです。底知れぬ所に充満していたかまどの煙にたとえられる煙が、この世界に吹き出し始めた。太陽と空がこの煙のために暗くなるほどにです。そしてその煙の中からいなごが地上に出て来ました。前回も述べた通り、ラッパのさばきの多くは出エジプト記におけるエジプトへの10の災害を下敷きにしています。いなごによる災いはエジプトへの第8の災害として出て来ます。今日もアフリカのエチオピアやケニアでは、いなごによる災害が頻繁に起こっているようです。一度その映像を見ましたが、たかがいなごと言えども、あれでは打つ手がないというほどの恐ろしいものでした。

しかし黙示録9章のいなごはただのいなごではありません。3節後半に「それらには、地のサソリが持っているような力が与えられた」とあります。すなわち恐ろしい毒を持ち、それで攻撃する。そしてその姿が7～10節に記されています。金の冠とは勝利を意味するのか、顔は人間のようとは理性的存在であるということなのか、女の髪のような毛とは一見人を魅惑する姿のことを言っているのか、それとも振り乱した姿を描いているのか。獅子の歯とはライオンのような獐猛さを、鉄の胸当ては頑丈さを、また多くの戦車が急ぐ時の音とはそのスピードを。10節には「サソリのような尾と針を持っていて」と記され、それが人に害を加えるものであると言われています。私たちはこれをイメージできるでしょうか。人によって絵をかいたら色々かもしれませんが、とにかく恐ろしい怪物のようなものになることは間違いないと思います。このような恐ろしいいなごが底知れぬ所に通じる穴から煙と一緒にたくさん出て来たのです。空を覆うほどびっしりと。

これは明らかに悪霊を指しています。それは 11 節からも分かります。このいなごたちは底知れぬ所の使いを王としているとあります。その名はヘブル語でアバドン、ギリシア語でアポリュオンというがありますが、それぞれ印がついていて、欄外にアバドンは「破壊」の意、アポリュオンは「破壊者」の意とあります。これはサタンあるいは彼に仕える代表的天使を指しているのでしょう。

この恐ろしいいなごのすることが 4～6 節に書かれています。それは額に神の印を持たない人たちに害を加えることです。つまり神を信じず、神を退けているこの世の人々に対するさばきとしてです。5 節には、「その人たちを殺すことは許されなかったが、五か月間苦しめることは許された」とあります。5 か月間とはいなごが生きている期間であるとある人たちは言います。ただし通常いなごは何日間かその地に滞在した後、移動しますが、ここでは 5 か月間丸々人々を苦しめる。つまり厳しいさばきを意味するとある学者は言います。いずれにしろ、この数字は象徴的な表現で、これはすべてが神の完全なコントロール下で行われることを示すものです。6 節には「その期間、人々は死を探し求めるが、決して見出すことはない」と言われています。苦痛がひどくて死にたいと願うのです、死が逃げて行く。これは何を語っているのでしょうか。これは悪霊たちを通しての苦しみとさばきのことを述べているのでしょう。参考になるのはローマ人への手紙 1 章 24 節以降で、神を神としてあがめず、神に逆らって生きる人々に対して、神は彼らをもその心の欲望のままに汚れに引き渡すと言われていることです。罪人の集まりであるこの世界が最後の滅びにまだ至っていないのは、神が様々な方法で私たちの悪を引き留め、それが暴走しないように歯止めをかけてくださっているからです。しかしいつまでも神に従わず、反抗する者たちに対して、神は悪を抑制する手綱を離すということが言われている。するとその人はいよいよ自分の欲望の道へと突進する。妨げがなくなり、これぞ自由だ！これぞ私のやりたかったことだ！と喜び叫んで悪の道へ突き進み、引き返すことができなくなる。その結果、性的に倒錯した状態に至ったり、恥ずべき情欲に身を任せるようになったり、あらゆる不義、悪、貪欲、悪意、ねたみ、殺意、争い、欺き、悪巧みにまみれるようになる。神の守りがもうないので、悪霊の力がいよいよ働くのです。そしてその道を進んだ先に幸せはない。幸せがあると思って進んで行って、その先にあったのは苦しみであり、悲惨であった。サソリの針に象徴されている痛み、心痛です。自分と周りの人々に不幸と災いをもたらし、ついに

は死を願うほどになる。これは確かに今日この世に多く見られる状況ではないでしょうか。これこそ私のやりたいことだ！求めていたことだ！と喜びの声を上げて進んで行きますが、その先に待っているのは絶望。幸せがあると思って追いかけたのに、それはない。それは悪霊に騙され、導かれて行った結果です。そしてそこに神のさばきが現れているということなのです。

13 節以降の第 6 のラッパは、このさばきをさらに前に進めるものです。13 節に「第六の御使いがラッパを吹いた。すると、神の御前にある金の祭壇の四本の角から、一つの声が聞こえた。」とあります。祭壇はこれまでも聖徒たちの祈りと関係して出て来ました。その祭壇から聞こえた一つの声とは、聖徒たちの祈りに応えて発された主の声だと考えられます。主は 14 節で第 6 の御使いにこう言います。「大河ユーフラテスのほとりにつながれている、四人の御使いを解き放て。」この 4 人の御使いは自由でない状態に置かれていますから、悪い意味での御使いを指していると考えられます。さてユーフラテスはイスラエルに約束された領土が最も拡大した時の境界線で、その向こう側にいる民はイスラエルにとって常に脅威でした。実際イスラエルのさばきのために用いられたアッシリヤやバビロンはユーフラテスの向こうからやって来ました。また黙示録が書かれた 1 世紀において、ユーフラテスはローマ帝国の東端にあたり、その向こう側のパルティア人はローマにとって大きな脅威でした。つまりここには境界線上で待ち構えていて、いつ襲いかかって来るかわからない脅威的存在というイメージがあるわけです。そこにつながれていた 4 人の御使いが主の命令によって解き放たれます。その彼らの上に主が完全な権威を持っていることが 15 節でも述べられています。その時、その日、その月、その年も計画されています。すると、その 4 人の御使いのもとで働く勢力なのでしょう、2 億もの騎兵が現れ、彼らが乗る恐ろしい馬が現れます。これもまた怪物のような存在として描かれています。17 節以降にその様子として、「燃えるような赤と紫と硫黄の色の胸当てを着けて」とあります。この 3 つはその後の「口からは火と煙と硫黄が出ていた」に対応するものかもしれません。18 節にもこの三つが繰り返されています。そしてこの火と煙と硫黄で思い起こすのは何でしょうか。それは創世記 19 章のソドムとゴモラのさばきです。そこにこの 3 つが出て来ます。創世記 19 章 24 節に「主は硫黄と火を、天から、主のもとからソドムとゴモラの上に降らせられた」あり、28 節に「彼が見ると、なんと、まるでかまどの煙のように、その地から煙が立ち上っていた」とあります。あのソドムのさばきを思い起こさせるさばきが行わ

れるということなのでしょう。そのため1/3が殺されたとあります。さらにこれは馬なのに、17節に「頭は獅子の頭のように」とあり、19節には口ばかりでなく、尾にも力があって、「その尾は蛇に似て頭を持ち、その頭で害を加える」とあります。この第6のラッパの災いは明らかに第5のラッパよりも進んでいます。第5のラッパでは人々は殺されませんでした。第6では死が起こっています。苦しみ、心痛、絶望に加えて、死も生じています。それはまだ1/3、すなわち部分的なものであって、最後のさばきが来たわけではありません。しかしその前触れとなるようなさばきが地に臨むということなのでしょう。

このさばきが最終的なものではないということには神のあわれみが示されています。最後の20～21節には、これらの災害によって殺されなかった残りの者たちがいると言われています。彼らには悔い改めのチャンスが与えられています。ところがそこを読むと、彼らは悔い改めず、なお偶像を拝み、悪霊に従う歩みを続けると言われています。また殺人、魔術、淫らな行いや盗みなど、神に喜ばれない歩みをやめず、それを続けると言われています。せっかく与えられているあわれみの時を生かさないので。ここにこの世は良くなることのないということが明白に教えられています。災いが起きれば、悔い改めの機会が与えられれば、人々は悔い改めるかという、そうは行かない。ですから私たちはこの世に甘い期待を抱くことはできないと教えられます。時間が経てば、やがてこの世は良くなっていくかと言えば、そうはならない。この世は益々ここに書いてある方向に進むのです。そしてその結果、この世に対する神のさばきはいよいよ明らかに示されて行くことになるのです。

以上の箇所から最後に3つのことを短く述べてまとめたいと思います。一つ目は神のさばきと悪霊たちの働きということです。今日の箇所にはサタンと悪霊たちの働きが恐ろしい絵で描写されました。底知れぬ所からかまどのような煙が立ち上り、太陽と空は暗くなり、その煙と一緒に恐ろしいなごが出て来ました。また口から火と煙と硫黄を出す馬が現れました。黙示録が語っていることは、この象徴的表現の下で私たちは自分を取り巻く現実をもう一度捉え直す必要があるということです。悪霊たちは決して甘く見ることはできません。私たちはそのことをこの黙示録のおどろおどろしい描写を通してはっとさせられるのです。黙示録の表現はこのように私たちにある意味でショックを与え、眠りこけている私たちの心の目を覚まし、たたき起こす効果を持っています。私たちは現実にもこのような霊的戦いの中

にあることを教えてくれるのです。ですから私たちはこんな話は不可解だと言って投げ捨てず、この光の下で自分を取り巻く現実を良く見つめ、新たに理解し、正しい恐れを抱く者でありたい。しかし同時にすべては神の主権の下で起こっていることが強調されていました。悪霊たちでさえ、何と神が世をさばくための道具となっています。その神が持つはるかに高い主権もしっかり心に刻みたいと思います。

2つ目は主の民の幸いについてです。クリスチャンもこの世で苦しみにあいます。クリスチャンであるがゆえの世から受ける特有の痛みもあります。しかしそれは今日の章で描かれた、この世の人々が味わう苦痛とは全く異なります。主を信じる者はキリストにあって罪を赦され、神との平和をいただいています。その神が私たちに悪いようになさるはずがありません。たとえ人間の目に悪いように見える出来事が起こっても、神はすべてのことを用いて私たちの真の益につながるように導いて下さいます。そして今日の章でも、主の民はこのさばきの対象でないとはっきり言われています。私たちはそのことを信じて、多くの困難の中でもすべての上に主権を持つキリストに信頼し、心痛とは反対の平安の内に歩むことができます。イエス様はヨハネの福音書 14 章 27 節で言われました。「わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。」 このイエス様の恵みの中に一層生きる者とされたいと思います。

そして3つ目は、もし今日の箇所が語るような心の痛み、罪から来る痛み、絶望やそれに近い思いがあることを思うなら、私たちの唯一の逃げ場であるキリストのもとへ行くべきであるということです。今日の箇所にさばきは始まっているが、まだ最後ではないこと、なお今は悔い改めの機会が与えられている時であることが示されていました。キリストのもとに行くなら、その人の罪は赦され、神のさばきの下にある者ではなくなります。イエス様はヨハネの福音書章 6 章 37 節で言われました。「わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません。」その人は底知れぬ所から立ち上り、この世に充満する悪の力に捕らえられ、それによって苦しめられたり、痛められたりすることがなくなります。私たちの身代わりに死んでくださり、復活された主権者キリストの守りのもと、平安の内に永遠のいのちに至る救いの道を歩む者としていただけます。その幸いへと、今日の箇所を通して導かれて行きたいと思います。